

江北の四季

令和2年

8月9日

第19号

残暑お見舞い

申し上げます



フウセンカズラ(風船葛)

つる性の一年草で、巻きひげを持ち、周囲のものに絡みつきながら、伸びていきます。白色の小さな花を咲かせ、その後、可愛らしい紙風船のようにふくらんだ袋状の実をつけます。実が茶色く熟すと、黒地に白いハート模様の入った丸いタネが得られます。風船状の果実もタネの表情も、愛嬌があります。

○立秋、第三十七候、初候、涼風至(すずかぜいたる)。

涼しい風が吹き始める頃。まだ暑いから

こそ、ふとした瞬間に感じる涼風が嬉しい。

秋きぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる 『古今集』

秋が来たと、はつきりと目にはみえないけれど、草葉をそよがせる音に、はっと気づきました。

藤原敏行が秋立つ日(立秋の日)に詠んだ歌だそうです。

八月七日が二十四節気の一つ、立秋でした。時候の挨拶が「暑中お見舞い」から「残暑見舞い」に変わります。二十四節気は一年で最も昼の長い日を夏至、一年で最も昼の短い日を冬至、昼と夜の長さが同じ日を春分、秋分とし、この四つを春、夏、秋、冬を中心として決めた暦で、この四つの節気を「二至二分(にしにぶん)」といいます。立秋はこの夏至と秋分のちょうど中間の日で、暦の上ではこの日から秋が始まります。立秋は、立春、立夏、立冬と合わせて「四立(しりゅう)」といい、二至二分と四立を合わせて「八節(はっせつ)」といいます。なお、立秋は暦の上では一日だけではなく、処暑の前日までの約十五日間もさします。



イヌタデ(犬夢 赤まんま)

大毛蓼に続き、犬蓼(赤まんま)も咲き出しました。昔から子供たちのままごと遊びに欠かせない花です。赤い粒のような花をばらして赤飯に見立てて遊びます。♪ままごとあそびのかあさんたちはみーんな てっちゃん だいすきよ♪ かまぼこ板と赤まんまは、ままごと遊びの必需品でした。

植物名における「イヌ」は「本物(有用な植物)」に比べて役に立たないものに冠されています。イヌガラシ、イヌホオズキ、イヌツゲ、イヌビワなど。ヤナギタデの仲間は辛味があり蓼酢などに使われますが、イヌタデには辛みがないためにイヌがつけられました。ところがイヌタデの方がよく知られているので、本当の方(ヤナギタデ)を本タデというようです。



ハチクソウ(初雪草)



ネコノヒゲ
本当にひげのよう

今年は梅雨の長雨で、気がついたら茗荷がたくさん咲いていました。慌てて収穫し、冷やそうめんや冷や奴の薬味となり、唐揚げの材料となつて、夜のビールつまみとなりました。



ミョウガ(茗荷)

○八月八日から十日は、八九十(はくとう)の語呂合わせから、白桃の日だそうです。桃には古来から不老長寿を与え、邪気を払う力があるとされるとされています。

桃太郎は桃から生まれて鬼退治をしました。孫悟空は天界の桃園で、九千年に一度実をつけそれを食べると天地があらんかぎり生き長らえるとされていた桃を食べ、その後三蔵法師のお供をして天竺に行きました。イザナギノミコトは黄泉(よみ)の国にイザナミノミコトに会いに行きますが、そのウジのわいた醜い姿を見て逃げ帰ろうとして雷神の率いる黄泉の軍隊に追われますが、近くにあった桃の木の実を投げつけて軍隊を退散させ現世(うつしよ)に帰り着きました。

ということ、暑い夏には桃がいいようなので、大奮発して高額な桃をいただきましたが、ジューシーなものとはほど遠いものでした。桃ほど当たり外れの大きいものはないですね。



ハナシキブ(花式部)



クロホオズキ

毎年、こぼれ種に任せておいたら、黒色が緑色になってきました。



カッコウアザミ

カッコウアザミ(アゲラタム)は、耐暑性が高く、丈夫で育てやすく、挿し木で簡単に増えます。暑い夏はどの花も長持ちしないのですが、この花ならばと思い、一種生けにしてみました。丸一日たちましたが、全く暑さをものともしていません。



カッコウアザミ

ルビームーン

アマクリナム、シマススキ、ドリチヨスラブラブ



生花新風体



ドリチヨス…………

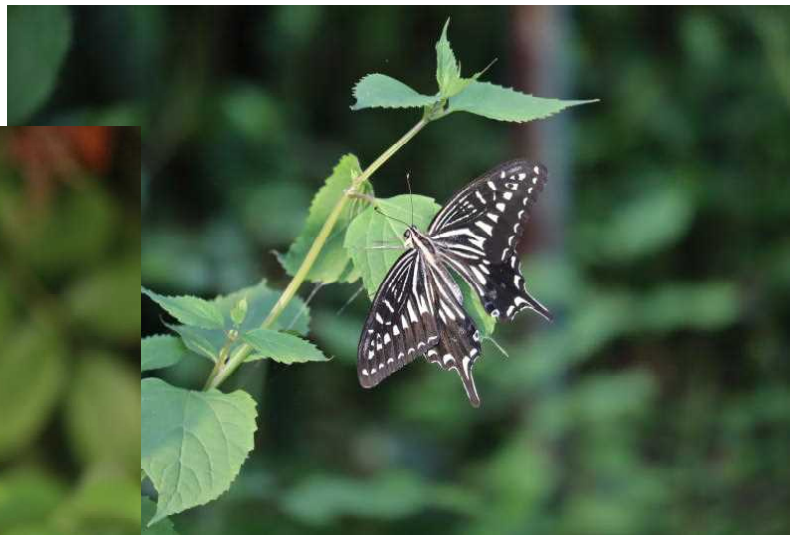
ゲンノシヨウコ、タカノハススキ、カッコウアザミ



生花新風体

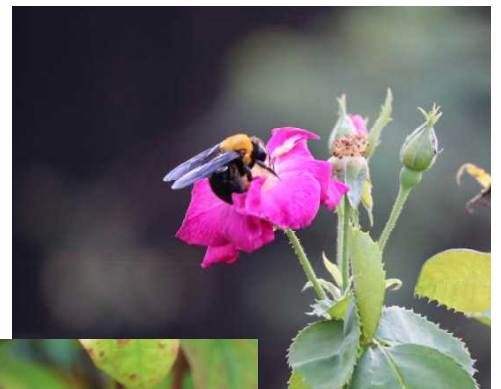


シオカラトンボ

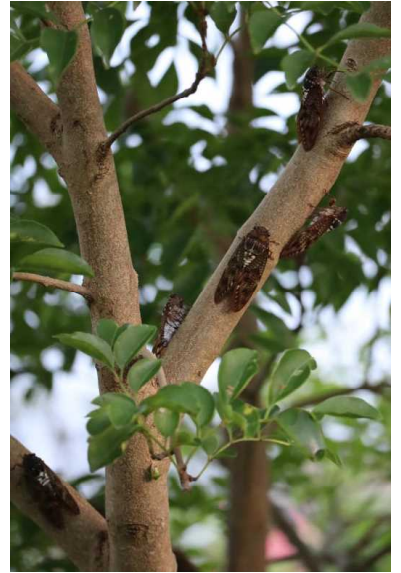


アゲハ

暑くなり、庭に花は少なくなりましたが、昆虫たちの楽園です。



オオマルハナバチ(ブンブンバチ) 3枚とも



アブラゼミ(油蟬)

シマトネリコの木にアブラゼミがぎっしり。日中の庭は蟬時雨です。シマトネリコは島に育つトネリコから名付けられたらしい。

○「閑(しずか)きや岩にしみ入る蟬(せみ)の声」が有名ですが、芭蕉は「やがて死ぬけしきは見えぬ蟬の声」という俳句もつくっています。

後者は芭蕉が亡くなる一ヶ月前に詠んだ句で、数日後には辞世の句とともとれる「この道やゆく人なしに秋の暮れ」を残しています。芭蕉の気持ちは分かりませんが、蟬は間もなく死ぬことも知らず、ただ今を精一杯元気に謳歌して鳴いている、と解釈したいものです。

「蟬の命は短い」とよく言いますが、これは成虫の話で、それでも2〜3週間は生きるようです。蟬の種類にもよるようです

が、幼虫は土の中で七年ほど過ごすと言われていています。多くの昆虫は寿命が短く、一年間に何度も世代交代を繰り返します。寿命の長いものでも春に生まれて秋には死んでいきます。そのことを思うと蟬の寿命は長く、小学一年生が捕る蟬は彼と生まれた年が同じかもしれません。

歳時記を見ると蟬を使った夏の季語には、蟬の殻、空蟬(うつせみ 蟬の殻のこと)、蟬時雨(せみしぐれ)、蟬の穴、などがあります。落蟬(おちせみ)という秋の季語もあります。寿命が来て木にとまる力をなくした蟬は、地面に落ちてひっくり返っています。もうしばらくすると落蟬を多数見ることになります。四季の移ろいがあるということとは、無常ということですね。



生花正風体(一種生け)

ヘクソカズラ(屁糞葛)

道端に咲いている蔓(つる)性多年草の雑草。傷つけると悪臭を放つことからこの名がつけましたが、

よく見ると、中心部が赤紅色の白い小花を咲かせており、愛らしい花です。花を水に浮かべた姿が田植えをする娘(早乙女)のかぶる笠に似ていることから、サオトメバナ(早乙女花)とかサオトメカズラ(早乙女蔓)ともよばれるそうです。また、花を伏せて置いた姿が灸(きゅう やいと)に見えることからヤイトバナという名も持つているとのこと。道端にたくさん見つけましたので、朝顔のようにいけてみました。適当な花器を持っていませんので、二重切りの上の重にいけました。涼しげな花ですが、残念ながら半日くらいしかもちませんでした



ホトトギス



セイヨウフウチョウソウ(西洋風蝶草)

